

[人、すなわち声を発す。]

人乃発声

Rising Voices
Give Heart.



2014
January
No. 21

1



埼玉県から来た玉造菜ちゃん(右端)。入口で磁気ボードを借り、お気に入りのターナーの絵を描き、出口でとびらーに渡した。撮影されてパソコンに取り込まれ、絵ハガキ風にプリントされた。受け取った菜ちゃんはテーブルで塗り絵を楽しんだ。次回の「とびらボードでGO!」は12月15日に開催。http://tobira-project.info

今月の
よき光し

美術館と大学がコラボレーション! アートなコミュニティ活動「とびらプロジェクト」。

text by Kentaro Matsui

東京・上野にある東京都美術館で開催されている「ターナー展」。
会場に入って鑑賞していると、展示された絵を磁気ボードに描く子どもの姿がちらほら。
『「とびらボードでGO!」という子どものためのプロジェクトです』と教えてくれたのは、
「とびらプロジェクト」のマネージャーで、東京藝術大学美術学部特任助教の伊藤達矢さん。
「とびらプロジェクト」とは、東京都美術館と東京藝術大学が連携して取り組むコミュニティ活動で、
一般公募で選ばれた「とびら」と呼ばれるアート・コミュニケータが、子どもと対話をしながら絵を鑑賞したり、
障害者のために特別鑑賞会を開いたり、美術館の建築の魅力をツアーで紹介する。
さらに、とびらーは自ら企画を出し、仲間のとびらーを集めてプロジェクトを実施するなど、自主的な活動も展開。
「とびらボードでGO!」もその一つ。東京都美術館の展示室の雰囲気を変えようとアーティストの日比野克彦さんが
提案した「磁気ボード」は、毎回の特別展で子どもたちに常時貸し出しされる定番アイテム。
そのアイデアに3名の大学生のとびらーが、「描いた絵を家に持ち帰る」という工夫を盛り込み、実現させた。
「美術館で退屈している子どもの姿が気になっていました。説明パネルは難しいし、騒ぐと叱られるし。
自分なりの絵の楽しみ方を見つけてほしくて『とびらボードでGO!』を企画しました」と、とびらーの鈴木直歩さん。
現在、とびらーは126名。サラリーマン、OL、学生、クリエイターなど職業も年齢もさまざまだ。
とびらーに、絵の知識は不要。求められるのは主体性だ。近々、第3期のとびらーが公募される。

